雜　錄

社會の本質に關する考察

高田保馬

Simmel は其著 Soziologie. 1908. の中に社會の本質を次の樣に說いてゐる。「余は最も廣い、而して定義に關する論爭を成る丈け避け得られる樣な社會の觀念から出發する、多數の個人が相互作用をなせる所に社會があるとか云ふのである。此相互作用は常に一定の衝動から起り又は一定の目的のために生ずるのである」。「此相互作用はこれを促がす所の衝動と目的とを抱いてゐる個人からして一の統一卽ち一の社會が化成する事を意味する。何となれば、經驗的意義に於ける統一は要素の相互作用に外ならぬからである。有機體が統一を形づくるのは各機官が其勢力を交換する事他の存在に對するよりも更に繁きものがあるからである。國家が一體をなすのも、其成員の間に相互作用が存するからである。世界も、若しその各部分が相作用しないならば、これを一體と名づけ得られぬのである」(ibid. S. 5 u. 6.)。

社會が複數心意の結合であり、その統一であると云ふのは寧ろ一の taulologie に近い、何人も異存のない事であると信ずる。問題は一に係つて、此結合、此統一の內容が果して如何なるものなるかに存する。Simmel の如きは正に心的相互作用

を以て此內容と見做すものである。勿論、統一體の要素の間には相互作用の不斷に行はれるのを認める、此事實より推して、統一卽ち結合はこれ相互作用なりと考へ、而して社會といふ結合が明に心意間のもの、卽ち心理的のものなるが故に、社會の本質を以て心的相互作用なりと見るのは、一應當然の事理であるやうに思ふ。然れども飜つて考ふるに、統一體をなせる各部分の間に特に相互作用の頻繁に行はれるのは事實であるが、統一其物を以てこれ相互作用なりとなす可きであらうか。特に頻繁なる相互作用は寧ろ結合の結果又は伴隨現象にして、結合の本質は他に存するものではなからうか。今たゞ人類の社會のみに就いて考ふるに、反對や戰爭や何人もこれを以て、明白にして激烈なる相互作用なりと認むるに躊躇しないであらう。勿論この反對、戰爭そのものを以て、社會又は結合と考へる學者もないではないが (Simmel, a. a. O., S. 247 ff; Giddings, Readings in Descriptive and Histrical Sociology.) 併しそれは社會とは全然其性質を異にした、正反對の事實であると考ふべきである。此混同此包括は敢て之を試みるも學理の究明に何の得る所もない。また飜りて考ふるに、相互作用と社會結合とは其程度に於て相伴はない。普通、結合の存する所心的相互作用の必ず相伴ふを常とするけれども、心的相互作用の程度減じたればとて、結合の度が此比例に減ずるものでなく、限界の觀念としては、心的相互作用の殆んど存在せずして結合のみ殘存し、又は心的作用未だ生ぜざるに、結合が既に存する事もまた、想像し得られないではない。此の如く必的相互作用は、云はゞ、社會前(プレソシアル)又は社會外(エクストラソシアル)の概念なるが故に、社會結合と同一視し又は其本質と見做さるべきものではない。社會の本質に關する心的相互作用說は此の如く明確なる難點を藏するを以て、更

に一の屬性を加へて此說を修正せむとする考が起つて來る。假に之を持續的相互作用說と名づける、

反對者又は爭鬪する者の間にも心的相互作用は存在せざる事無きのみならず、寧ろ甚だ激烈である。然れどもそは多く一時的のものに止まつてゐる。持續的なる相互作用に至りては常にこれを社會の中に覓めなければならぬ。また社會のある所常に多くは持續的なる心的相互作用がある。玆に於て一派の學者は此持續的なる相互作用、又は相互作用の持續性（又は共存の持續性）を以て社會の本質であるとなす見解の生ずるは當然の事理である。然れども　心的相互作用そのものが既に社會に非ずとするならば、そが單に持續的なるが故のみを以て、如何にして社會たり得るのであるか。事實に於て、心理相互作用は反對の場合に於ても時にはなほ持續的なる場合がある。吾人は思ふ、社會が單なる持續に存しないのは云ふを俟たずまた單なる相互作用も社會と相伴はず、ただ持續的なる相互作用の範圍が社會の範圍と頗る相近いとするならば、相互作用をして持續的ならしむるものこれ卽ち、社會の本質なりと見なければなるまい。共存に就いて云へば、同じく共存をして持續性を有せしむる所以のものを以て、社會の本質となすべきである。而して吾人の所見によれば有心者間の相互利視――もしかゝる生硬の造語を許さる可くば――これ卽ち社會の本質にして、此相互利視の關係あるが故に、共存も持續的なるを得心的相互作用も永續的性質を有するを得るのである、云はゞこれらの持續的なる事は相互利視と云ふ社會本質の一結果に外ならない。

こゝに利視と云ふのは吾人の他人に對する情意的態度の一である。吾人は他人に對して相互作用を營みつゝ、又はこれを營まざるに先だちて既に、又は營まざる間に於ても不斷に、一種の情意的態

度を持するものである。而してこの情意的態度が他人に對する相互作用の如何なるもの（反對的なるか又は結合的なるか）なるかを決定する。ここに情意的態度といふのは一定の他人が吾人の意識に上り來れる場合に於て吾人が此人に對して有する情意の方向、並びに、其意識に上り來らざる場合に於ても、若しそが意識に上り來るならば、如何なる方向の情意を以て迎ふ可きかを決定する吾人の傾向卽ち Mc Dougall の所謂情基 sentiment の方向を云ふのである。此方向には種々なるものがあり得るけれども、その愛着的なるものを以てこゝに利視と名づける。此の如き利視はそが情基として存在する時に於てこれを潛在的と名づく、情意に於て現はるゝ時には之を顯在的と稱する。而して、何れにせよ、利視が双方に於て存在する場合卽ち相互利視であつて吾人の社會の本質と云ふものは之に外ならぬのである。

此相互利視は何等心的相互作用の未だ行はれざるに先だち、若くば、其影響によらず、本能又は習慣の結果すでに存在する事がある。異性間の結合、母子間の結合、血族更に進むでは同類の結合の如きは其一例である。又は別に何等利害の關係によるに非ざれども、たゞ互に相交通したる結果として生じ來ることがあり、若くば、何等かの利害關係によりて相協働するに伴ひて生じ來る事もある。此後の場合は利害が金錢上の問題に關する時は明確に前者より區別し得られるけれども、精神的協働の場合卽ち信念の一致に本づく時に於ては前者と區別せらるゝ事が頗る難い。何れの道行によりて成立するにせよ、此の如くにして相互利視の存在する場合に於ては必ず、之が基礎となりて一の作用を現はして來る。若し、相互利視を以て一の體と假定すれば此作用たる相互利用は其用とも名づく可きである。

人其物の故なると利益の爲なるとを問はず、相利視する人々の間に於ては互に相手を利用せむとする事が起つて來る。心的相互作用は有心者の相對立する所必ず存在するものであるけれども、此有心者が互に相利視する場合にはそは持續的性質を有して居る。蓋し此場合、かゝる相互作用は利用の手段として用ひられ、而して利用は常に持續せられむ事を欲するが故に、手段たる相互作用はまた持續せらるゝ傾向を帶びて來る。此利用は二の方法に於いて行はれる。其一は交通にして、其二は協働である。交通は對面によると、よらざるとに論なく、相利視する人々に對しては一種の快樂である。これ、交通の本能と云ふ根本的一傾向の滿足せられるのみならず、之によりて同情理解の交換行はれ、從ひて兩性母子同胞の愛等も亦滿足せらるゝ事を得可く、進みては諸種の協働の準備また此間に行はれる。かくて交通は人による人の利用の一種と云ふ事ができる。協働に至りては勿論種々の樣式をとる事がある。同樣の傾向を有するものが同一の刺戟に對して同樣に反應する事によりて、又は互に目的の共同を意識し相互の利益のために努力を共にする事によりて行はれる。しかし其何れの樣式をとるにもせよ、協働は自己の仕事の効果の一部分を他人に與ふると共に他人の仕事の効果を自ら分享する事であるが故に、互に他人によりて相利益するものと見る可きことで明である。

互に相利視するものはその相手を利用するに至る事これ必然の道行であるが故に、利視を以て社會の體であるとするならば、相互利用は之より必然に生じ來る可き用とも見るべきで、或る意味に於てはこの用もまた、社會と云ふ內容の一成分を構成すと云つても差支が無い。然るに此相互利用のほか、社會と云ふ事實に伴つて來る伴隨の現象

がある。そは必ずしも社會の存する所にのみ存すると云ふのでない點に於て、相互利用と其性質を異にしてゐるものではあるけれど、常に多くは相互利用と結合せる重要の現象である。此種のものの中に就いて、第一に擧ぐべきは心的相互作用である。敵對の行爲に於て此心的相互作用を必要とすると同じく、また吾人は相互的利用を營むに當りても之を必要とする、そは云はば、利用の必要なる一通路を形成するものである。然れども二者の結合は決して必然的のものであると云ふ事は出來ない。無意識的に生じ來る協働は此相互作用を俟つ事がないからである。而して意識的協働にありても其計劃に於ては必ず心的相互作用に俟つべしと雖も、其遂行其成就そのものは必ずしも之を必要とするものではない。述べ來れる所によりて見るに、心的相互作用はたゞ社會の伴隨現象以外何物でもない。其範圍は社會の範圍と合一せざる事明白である。

次に擧ぐべき伴隨現象は目的の連帶又は目的の共同である。こは協働の半面又は要件と見るべきものと信ずる。吾人は協働によりて互に相利用する事を得るが、各自本來の目的はそれぞれに相乖離するものがあつて、各自そのまゝ自己の目的を遂行せむとするに於ては相互の利用が困難である。協働の實の擧がる爲めには必ず各自の目的に多少の變更を加へ其間に共同の形態を確定し連帶の關係を立せなければならぬ。各自の目的が此の如く改造せらるゝに於ては此目的に從ふ所の各自の行動既に區々なるものに非ずして行動の加へらるゝ外部に對し集積的結果を生じ恰も一體なるが如き作用を現ずるに至るのである。かくてまた、外部に對する作用の統一、ならびに目的の改造の道行なる相互的適應と云ふが如きは、相互利用の伴隨現象たる目的連帶の半面に外ならぬのである。

此見解よりして、從來の有力なる諸說に批評を加へたい。先づ第一に合意說が頭の中に浮んで來る。これは社會成員の意志の共同を以て社會の本質なりとなす說である。此說は吾人の取る所と頗る相近きものであるけれども、なほ多少の難點を有してゐる。第一に若し、合意と云ふ事を狹義に解釋する時は一切の强制關係に本づける社會は其實社會に非ずと云ふ事となつて來る。併し此難點は合意と云ふ事を極めて廣義に解釋する事によりて救ひ得らるゝとも見られる。第二、意志の結合と云ふ事が社會結合の一中心要素を形づくる事に關しては別に異論なきも、一切の結合關係を以て意志結合なりと云ふ事に對しては異論があり得る。吾人は上に述べたるが如く、寧ろ人間結合の根柢を以て感情乃至は意志として發動せざる傾向に存すると見るものである。所謂相互利視と云ふものは何等意志的要素を含まざる事あるも而もそは社會の本質をなすものである。此異見の結果は次の樣のことゝなつて表れる。若し意志關係のみを以て社會の本質でありとするならば意志關係の明存せざる所に社會なしとしなければならぬ。例へば、別に何等の協働的關係なき友人の相語る事を止めて相離散せる場合にありては、彼等は何等意志の共同なるものなきが故に既に社會をなさぬものと云ふ可きである。意志結合の生ずる度毎に刻刻に新しき社會に形成するものと見なければならぬ。而もこれは吾人が社會として理解したるものとは遙なる距離を有してゐる。また極端に云へば、甲と相親しきに拘はらず、之と關係なき事項に熱中して、其人を全然忘れ去れる時に於ては社會の中絕せるものと見なければならぬ。然れども、これまた、吾人の理解してゐる社會の意味に反する。

第二に相互適應 (coadaptation) 說 (Davis) を考へる。成員間の相互適應を以て社會の本質となす

說である。こは心的相互作用說と同一の難點を有するものである。相互適應は勿論社會をなす成員の間に存在するけれども、また社會をなさゞるものゝ間にも存在する。敵對關係を持續するものゝ中に於ては自ら相互適應あるべく、また人類と結社的關係を保たざる異種の生物との間にも相互適應がある。勿論社會をなすものゝ間に於て相互適應の特に著しい事は事實である。然れども、こは前に述べたるが如く、相互利視より生じ來る結果に外ならぬ。相利視するものは勢相利用せむとし、相利用せむとすれば特に適應の必要を強く感ずる。而して利用が不斷なると同じく此適應も持續的に行はるのは自然である。卽ちそれは社會の一結果として見るべきもので、社會そのものと見るべきものではない。

第三、Cooperation, Coordination 說 (Ellwood)。社會成員間の協働又は整序を以て社會の本質と認むる說は相互適應說の餘りに廣きに失したると反對に狹きに失するものである。整序又は協働が例へば一生物內にも存すと云ふが如き難點はこれを意識的のものと限る事によりて救はれる事が出來る。しかし、整序なく協働なき所果して社會がないのであるか。協働と云ひ整序と云ふものは成員の側に於ける有目的なる活動に關する、卽ちそはかゝる活動に於ける統一であり調和である。然れども、此の如き活動を營まずして單に交驩の行はるゝ場合になほ社會があり、更に交驩なくして互に相別れ相思慕する所に社會があると信ぜられる。而してこれらは何等協働又は整序の概念の中に攝す可からざる場合である。若し整序を以て協働と同一義のものとせず、更に廣汎なる意義を與へ一切の活動に於ける秩序と調和との意にとらむとするならば、第一其觀念の餘りに茫漠として捕ふるに所なき缺點があるのみならず、依然として

何等成員の共同的活動を營む事なき所に社會の存するのを說明する事が出來ない。勿論斯說の主張者の唱ふる樣に一團の生物が社會をなせりや否やを判斷す可き外部的標準は整序の有無卽ち其活動間に目的の一致ありや否やと云ふ事である。然れども、こは內部の心理的狀態に立ち入る能はざる場合に於ける一の便宜なる標準たるに止まるものである。之を社會其物と同視せむとするは病兆を以て病氣そのものと同一視するに同じい。

次に同類意識を以て社會の本質に擬し、其存する所社會あり、存せざる所社會なしと云ふ說にも亦免る可からざる非難がある。論者(Giddings)の意見によれば同類意識と云ふものは自他の類似の知覺及び之に伴へる感情的要素を含むものである。然れども、自他の類似の知覺は往々にして激しき反對を齎すものである。類似が結合の緣因たる事あるは爭ふべからずとするも、そはまた反對の緣因である。或る意味に於て一切の反對は類似に本づくと云ひ得らるる。かゝる類似の知覺と之に伴へる感情的要素が如何にして社會の本質を形成する事を得るか。また事實に於ける結社の關係は決して類似の程度と相一致せるものではない。吾人は往々にして吾人との差異の特に大なるものと結社し類似の著しきものと何等の結合をもなさざる事實と傾向とがある。同類意識を以て社會の本質とするならば如何にしてかゝる事實が存在するか。或は之に答へて、結社せるものは結社と云ふ點に關して特に其成員を同類なりと意識するものなりと云ふものがあるかも知れぬ、しかし此の如きはたゞ社會をなせりとの意識が成員に存在すと云ふまでの事に過ぎない。

附記。本篇の最初の目的はたゞ心的相互作用說の反駁に存してゐた。今心的相互作用を以て社會なりとなす人にそは社會に非ずと非難するにしても、其何故なりやは更に論を方法論上から進めなければならぬ。これは其他の說に對しても同じである。か

かる方法論上の根據の上に築かれない此論は砂上の殿堂に過ぎない。しかし私自身に於ては此主張がよりて立つ所の論據がないでない。たゞ此論據の叙述には更に研鑽を加へて筆を新にする必要があると信ずる。從ひて、此小篇はいまの所依然基礎のないものとして置くより仕方がない。

心能の相關研究上の一問題

楢崎淺太郎

一　心能の相關研究勃興の理由

所謂科學的心理學は、精神現象の普遍的性質を闡明しようとして、先づ復雜なる精神過程を分析して普遍的の意味を有する要素的過程と爲し其過程の合成に依つて具體的精神現象を理解し說明せんとして居る。されど精神現象の一層普遍的な認識に進まんと欲するならば、要素的過程相互間の必然的關係を明にして、一定の法則を定め、更に其法則を統一する概念にまで達せなければならぬ。而して心理學の分析的研究は、要素的過程の間に親密なる相關(Correlation)の存在せることを豫定して居る。然るに要素的過程相互の關係並に要素的過程と複雜なる精神過程との間の關係は、多くは臆測に止り、未だ充分に精攻せられ、證明せられては居らぬ。この關係の不明なのはスピャマンの云つた通り(三二百二—二百三頁)科學的心理學の一大弱點である。

次に通俗の一般的證明によれば、ある特殊心能の優秀なるものは、他の特殊の事柄の遂行に於ても亦幾許か優良であると確信して居る。換言せばその相關は、ある特殊の心能の間にばかり存在して居るのだと信じて居る。之に加へて通俗の見解